

劃す。清朝考証学を支える実証主義は、李贄の哲学の一支柱であり、太平天国の革命思想には封建思想一般に対する批判がなされた。公羊学にもとづく康有為一派の改良主義は、唯物論的要素を混えてはいるが、未だ唯心主義の基調を出ていなかった。一九二一年中国共産党の成立は科学的唯物主義のための基本条件が成熟し、唯心主義世界観に対する決定的批判としてあらわれ、その最高の文献として毛沢東一連の著作があり、中国哲学史上もっとも大いなる時期を劃するものであるという。

著者の考えでは、唯心主義はつねにより多く支配階級のために、唯物主義はつねにより多く被支配階級のためにあり、そして唯心主義世界観の全歴史を通じて孔子の權威が一貫して存在し、孔子は自ら与り知らない状態の下で、長い間特定の社会勢力のために服務させられる結果になったのであると云べる。

以上本書の概略を紹介したが、私の未熟のために誤りをおかし、その最も美とする点をのがしたことを恐れる。本書が哲学思想史研究において、歴史を如何に見るかという基本問題の重要性を痛感して執筆されたことは、初めに紹介した通りであるが、著者の主張する階級史観は、「新興勢力」とか「商工階級」「ある社会勢力」といった表現に止まり、それらの階級の歴史的な意義については充分な説明がない。またある階級と思想との関係は、多くの場合表面的な説明で結びつけられている。しかし本書が哲学思想史を社会階級との関連において考えたことは、わが國の学界に新しい方法と大いなる刺激を与えるものであり、況んや著者の蘊蓄を以てして、一つ一つの思想の内容と発展の跡を説く明快さは、読書を飽かしめぬものがある。(A5判 三四三頁 昭和三九年九月 法律文化社刊 定価一、八〇〇円) (滋賀県立短期大学教授)

今西春秋著

校注異域録

船越昭生

本書は「異域録」の解題、満文本の音訳と訳注、満文本の漢訳、索引、ならびに満文「異域録」・完結本漢文「異域録」の復刻を収録し、別に図理探の総旅程図を附録する。

内容の主要部分をなす、満和对訳の原稿は第二次大戦末期から戦後にかけて、一応北京においてすでに成稿されていたものである。著者今西教授は、その後奇禍のため捕囚の身となり、やがて五四年に釈放されて帰還、翌年、たまたま訪日中の郭沫若氏一行への陳情が容れられたものか原稿が送還され、さらに五六年にはこの原稿のもととなった満文「異域録」(本書復刻)も中国側の好意によってフィルムが著者に届けられたとき。まさに本書は一篇の変転の物語りをもつものといわねばならない。

二十年余の歲月と複雑な曲折のうち成ったこの稿が、いま立派な本となって陽の目を見、学界共有の財産として供せられるに至ったのである。著者の感懐は察するに余りがある。

『異域録』は一八世紀初頭の蒙古・シベリア・ロシアにわたる旅行記で、清朝の旗人図理探の撰になる。彼の旅行の目的は当時カスピ海の北方に遊牧していたトルグートに清朝への忠誠と故地への帰来をすすめるためのものであった。

使節の一行は康熙五一年(一七二二) 出發以来、北京から蒙古を横断

し、シベリアを通過してヴォルガ河畔のトルグートの居住地に至り、三年の歳月を費して康熙五四年（一七一五）に帰着した。

「異域録」は、この大旅行における豊かな見聞を正確に記載している点、中国の地理紀行文獻のなかで、きわめて特異な地位を占めている。たとえば、旅程中の自然・民俗・物産・戸口・軍備などきわめて整備された体係を有ち、その記述内容はそのまま地誌としても十分に通用しうるものであり、つとにスタウントン Stanton, G. H.・何秋濤などによって、その内容を信ずるに足るとして称揚されたところである。

当時アジア・ロシアに関する地理的知識は中国やヨーロッパに於いて明確にされていないだけでなく、ロシア自身においてすら、科学的な探検事業の必要を痛感していた位であった。その点からみても、この時期に書かれた「異域録」のもつ重要な意義を指摘することができるのである。

「異域録」には、満漢の両文によって書かれた二種類の本がある。漢文本には雍正元年の刊記をもつ原刊本、同三年の再刊本をはじめ昭代叢書・守山閣叢書・朔方備乘・小方壺齋輿地叢鈔・澤古齋重鈔・借山山房彙鈔などがあり、原刊本は不分巻、輿図一葉・序跋二一葉を併せる。前記刊本は各種各様の体裁をなすが、昭代叢書のみがよく原刊本の趣を伝えている。しかし、これらの諸本はいずれも末尾が完結した文辞を有せず、何秋濤以来脱簡が注意せられていた。

一方、満文本はきわめて稀覯で、従来知られたものはメレンドルフ Mullendorf, P. G. 「満洲語書誌 Essay of Manchu Literature 1889」に著録された刊本・抄本（最近まで所在不明）と、北京で今西教授の手許に持込まれた刊本・抄本があるに過ぎなかつた。

た。

メレンドルフ旧蔵本はかつてフツクス教授がベルリン国立図書館で目録されたことが知られていたが、本書刊行を機に昨年チービングン大学に蔵されていることが確認されたほか、パリ国立図書館・オックスフォード大学にも所蔵されていることが明らかとなった。

今西教授の蒐集と研究によって、すでに、一九四四年、満漢両本はほぼ同様の内容をもちながら、満文本の方が記事詳細で、漢文本にない自序や末尾の奏請を有している点、また「漢書を併せて云々」の文言などから、より基礎的なテキストであることが指摘されていた。

なお、ガストン・カーエン Cahen, G. によるとロシア人によって訳された満文のテキストがあるという。すなわち、北京伝道団付留学生であったロツキン Rossokin, H. によって、一七六四年にロシア科学学士院「學術問題月刊論集」*Бюллетень Коринниа Империи о учебныхъ Дѣлахъ* にロシア訳「異域録」が発表せられ、また、レオンティエフ Leontiev, なるもののロシア訳もあるとしている。

ところで前述の漢文本・満文本のいずれとも異なる漢文の一本が著者によって明らかにされている。すなわち著者が「完結本異域録」と呼ぶもので、実はこの本の発見と紹介とが、「校注異域録」の大きなメリットなのである。従来の漢文原刻本とはちがって石文焯の序文ならびに自序があり、さらに桂岩識語・残脱完結録など従来の本にみられない部分を有しており、著者は図理探みずから手を加えたものと考えている（この間のみ入った事情については本書一四一―一六頁参照）。

完結部の内容は三つの記事より成る。すなわち

①康熙五九年、清朝のジュンガル討伐問題に関して蒙古のフトウクトゥを訪ね、さらにセレンギンスクに至ってイズマイロフと会った時の記事。

②康熙六〇年（完結本の六一年とするは誤り）、北京に来ていたイズマイロフの帰国を送ってセレンギンスクに至った記事。

③康熙六一年、北京に残留していたイズマイロフの副使ランゲをセレンギンスクまで送り届けた時の記事。

いずれも当時、図理琛がセレンギンスク出使の際に、現地から発した奏文や帰国奏上したものをそのまま掲げて記事としたものである。これらは露清交渉史上、とくにジュンガル問題に関する従来未見の漢文資料であって、ロシア側の他の資料とこれとを併わせることによって、この方面の研究に新しい進展を期待させるものである。

満文異域録に対する訳文は、いくぶん古い文体ながら、簡潔にして要を得たなかなかの出来栄え、附せられた注はその数二百三十九、なかんづく土爾虎特國・布隆汗山・蒙古橫断路・アヌキ汗の居住地などに関するものはいずれもゆうに一論文をなすに足るもので博引に流れず、著者の見識によって説明されて問題も少ない。

つぎに、内容に関する若干の希望と問題点を思いつくまきに書連ねる。

評
第一は「異域録」の農業関係史料に関してである。一八世紀のシベリア農業史料は極めて乏しく、開拓初期の生活や文化、在来文化と新文化の関係などを知る上に貴重な手掛りを与えるものと

してその史料の価値はかなり高いものと思われる。そこで、*usin tarie be sambi yangsara be sarkit*、「田畑培うを知る。草取るを知らず」とされる農業の状態など訳注に示された新疆の農業状態だけでなく、バルラス、Pallas, P.その他の一八世紀のシベリア旅行家たちの記事から、その姿を再現してほしかった。

つぎに風俗を示す一連の文中「juwan ninggun tsun be emu ci obuhabi, juwan juwe yan be ewu gin obuhabi, minggan okson be emu ba obhahi」、「一六寸を一尺となしたり。一二両を一斤となしたり。千歩を一里となしたり」（本書三三頁）というくだりがある。ここで一二両一斤というのは一体度量衡のどれに当るのだろうか。満漢両本ともに同じ排列となっているが、尺度を示す単位の間異なる単位が入りこんでいるのはおかしい。この前段に、貨幣単位があるので、そちらへ入れるべきか、または重量の単位として千歩一里のあとにつけるべきか。旧ロシアの尺度はきわめてわかりにくいので、本文の錯乱を訂し、旧ロシアの度量衡との対比が訳注にほしいところである。

さらにこれは基本的な問題なのだが、ロシアのロシア訳「異域録」の原本となった満文本の問題がある。

カーエンはロシア語をもって満文本によるというのだが、筆者がたまたまエフイーモン Ehmova A. V. の「露人太平洋探検史 *Ита Иеропит Русских Дочетурун на Тихом Океане 1948*」の挿絵中のロシア本「異域録」輿図をみた処では、満文本輿図になく、漢文輿図にのみみられる二三の文言がロシア訳されており、すくなくとも、ロシアは漢文本を手許に有っていたことが明らかとなる。このロシア使用本の漢文本とは一体どの本だろうか。

恐らく雍正元年の原刊本、又は再刊本とは想像されるのだが、場合によってはここに復刻された「完結本」の原本乃至は写本であるかも知れない。そうでなくてもロシアの土地を旅行した記録であり、地名・民族・風習など、ロシア人ならではの特異な訳注があると思われなければならない。一日も早くロソキンの用いた満・漢の二つのテキストをみたいと思うのは著者としても同様であるにちがいない。

なお、本書中現寸大に復刻された「異域録興図」（滿漢兩文）は極めて特徴あるもので、初期シベリア地図の性格をよく示しており、とくに「ゴドノフ」「Орлов 地図」との何らかの関係を推測させる。エフィーモフは「異域録興図」を、イルクーツクにおいて案内の陸軍中佐プロコフイ・ストウピン、Инокентий Крыжун に内緒で、こっそりと写したものとするが、彼はそれを述ぶ何らの資料もあげていない。異域録の研究のなかで、今後の解明の待たれるものの一つである。

おわりに全体を貫く著者の校註の態度について、もう一言だけ望蜀の言を述べさせていただく。

著者は、この校註に当って、中国学の素養と、西洋風の知識を文字通り駆使して居られる。そして、かなりな程度において、それは成功を取めている。しかし、日本人にも直接にロシア・シベリアの土地を踏んだ記録が、この二百年来いくつが存在し、研究の跡も絶無ではないのである。

わが国のロシア学乃至シベリア学は一八世紀後半、カムチャツカへ漂着し、イルクーツク・ベテルスブルグまで旅行して、運よく生還した光太夫・磯吉らを柱川甫周・大槻玄沢など当代一流の碩学が訳問してつくった聞き書「北極聞略」や「環海異聞」に始まる。これが、幕末における馬場貞由・高橋景保などの語学研究に継承され、さらに明治前期の榎本武揚らに流れ込む。また吉雄耕牛の如き、蘭学者の手によってランゲの旅行記の翻訳された例も存在している。これらはいずれもすぐれた作品であり、著述の時期も「異域録」の作成時期に近く、必ずや「異域録」の注釈に有用であることを疑わない。訳注におけるこれら資料の利用は、より日本人の眼で、より具体的に「異域録」の理解を可能にしたであろう。反面また、この「校注異域録」によって、これらわが国の先学のロシア・シベリア知識が訂されることもあったであろう。著者今西教授には、かつて高橋景保に関する論文もあり、徳川時代の大陸研究にもかなりな関心を持って居られるのを知っている筆者はいつの日にか、この面からする増補も期待したい。

ともあれ、本書によって、「異域録」の研究が大きな前進を上げたことは明白で、その道標としての高い意義を称揚したく思うものは恐らく筆者のみではないであろう。著者今西教授の貢献と労苦に対して厚く謝意を表する次第である。

（三九八頁 図版四三、別図 一一九六四年三月 朝鮮学会発行 書籍文物流退会にて発売 約四千元）

（京都大学助手）